

# テイル形式の非アスペクト的意味

—テイル形式の否定形を中心として—

木 下 泰 臣

## 0. はじめに

「ご飯を食べている」「結婚している」などに代表されるテイル形式の意味・用法は多岐に渡り、日本語学習者が習得困難に挙げる学習項目の一つになっている。それはすなわち日本語を教える者の説明不足であることに他ならない。学習者が初級レベルであれば、テイル形式には「動作の継続」と「結果の持続」の意味があるといった説明で切り抜けられるかもしれない。しかし、中級になるとそれでは学習者の理解もおぼつかない。そこで、納得のいく説明を求めて文法書を読みあさったとしても、そこに書かれていることは「テイル形式には「継続」「結果」「習慣」「経験」などの意味がある」といった用法の列挙ばかりである。

用法とは、表出された文における意味上の分類である。書かれた文を分類して、分類上の名目として「継続」「結果」「習慣」「経験」などと呼んでいるに過ぎない。こういった後付け的な分類は、ある場面での表現形式を用いるかといった産出面における問題を解決するにはあまり役に立たない。これは例えば、テイル形式に「習慣」の用法があるからといって、習慣について述べる時は必ずテイル形式を用いる、というわけではないことから明らかである。

日本語教育の観点から言うと、テイル形式の適切な運用場面を提示するためには、どのような側面において非テイル形式と対立し、どのような側面においてテイル形式の用法が成立するのかといったテイル形式を統一的に把握する理論的な背景が求められる。本稿はそのような認識に立ち、テイル形式の分析を試みるものである。

テイル形式の把握の仕方は従来、二つの仮定の下に行なわれてきた。第一にテイル形式の意味は非テイル形式(スル、シタ)との対立としてあらわれるという仮定であり、第二にアスペクト的意味において対立するという仮定である。本稿は主に第二の仮定について修正を求めることを目的とする。筆者は前稿においてアスペクト的意味の対立を持たないとされるテイル形式の否定形が用いられる談話を分析し、それらを説明するために<現象の解釈>を仮定し、テイル形式は知覚情報に<解釈>が加えられている点で非テ

ル形と対立することを主張した。本稿ではその〈現象の解釈〉の拡大を課題とする。本稿は次のような構成をとる。まず、1で言語表現の研究と場面の不可分性の認識を述べる。2では、テイル形式否定形の把握の仕方について先行研究に対する筆者の立場を述べる。3では、〈現象の解釈〉からテイル形式の表現効果が生まれるメカニズムを、談話分析を通して論ずる。4では、テイル形式肯定形のアスペクト的意味の変化に〈現象の解釈〉の立場から統一的な説明を与え、〈現象の解釈〉とアスペクト的意味との関係を整理する。

## 1. 言語表現と場面

言語表現が意味を持つためには、どのようなディスコースであれ、コミュニケーションを目的としていると考える必要がある。〈はなしあい〉であれば話し手と聞き手のコミュニケーションである。〈かたり〉であれば表現者と受け手のコミュニケーションであると考えられよう。コミュニケーションを目的としているのであれば、言語表現は常に「場面」によって規定される。

場面とは、相手、環境、表現の内容、表現の目的など言語表現にかかわる要素を統合する概念である。日本語で何かを表現しようとするとき、まずいくつかの表現類型を意識し、その中から場面に合わせて一つを選択して表現する。もちろん、聞き手の側も場面に合わせた表現が用いられることを期待している。言語表現と場面との対応関係がその時代の社会慣習として適切でないときは違和感、ないしは抵抗感を抱くことになる。

文法とは一般的に単語を組み合わせて正しい文を作る規則であると言われている。脱場面化された文が文法書の中にしか存在し得ないとすれば、文法とは場面に対応し、単語を組み合わせて文を構築する規則であると認識できる。正しいか否かではなく、場面に対して適切であるか否かが重要な問題とされる。テイル形式を例にすれば、ある場面におけるテイル形式の使用には場面の要請があると考えるのである。次の二つの発話はいずれも視覚情報によって知覚した事実を述べる文であるが、寺村秀夫(1984)によると前者は適切であるが、後者はそうではないとされる。

- (1) a. (道端で) あ、あそこに財布が落ちているよ。
- b. (道端で) あ、あそこに石ころが落ちているよ。

これは、認知言語学でいうところの図 (figure) と地 (ground) の違いにある。前者

の「財布が落ちている」は道端という環境においてたやすく図として解釈されるのに対して、後者の「石ころが落ちている」は道端という環境では図になりにくいいため、違和感を覚える。聞き手が後者の発話を意味ある情報として解釈しようとするれば、話し手にとって「石ころ」が特別なもので、普段はその「特別な」石ころ」が道端に存在しないという前提を持っていると解釈される。逆に、「財布が落ちている」は図として焦点化されやすいため肯定形では適切であるが、否定形で発話されると理解に時間を要する。

(1) ' (道端で) あれ、財布が落ちていないよ。

「道端に財布が落ちていない」という現象は珍しいことではないため通常は発話されない。聞き手がこれを意味ある情報として解釈しようすると、話し手が道端に財布が落ちている (と期待している) という前提を持って発話したと推論・解釈することになる。

このように、言語表現が意味ある情報として理解されようとするれば必ず場面を踏まえた分析がもとめられる。したがって、場面分析を抜きにした言語表現の研究は成立し得ないのである。

## 2. テイル形式の把握の仕方

テイル形式の把握の仕方の第二の仮定は、非テイル形式とテイル形式がアスペクト的意味において対立することである。

(2) A: どうしたの? 顔色が悪いよ。

- B: それが・・・、
- a. 論文ができなかったんです
  - b. 論文ができないんです
  - c. 論文ができていないんです

脱場面化された状況下において考えるなら、Aの問いに対して(a), (b), (c)はいずれも発話され得る適切な文である。しかし、実際の会話では常に場面が特定されており、場面に合わせて表現が選択される。例えば、締め切りに間に合わなかったという意味であれば(a)であろう。考えが煮詰まってどうにも筆が進まないという窮状を訴えるなら(b)が、そして、書きかけの論文を想起しての現状報告であれば(c)が選ばれると思われる。

従来、このような使い分けはアスペクト・テンスの対立によって説明されてきた。工藤

(1995,1996) によると、スル・シタ・シテイルはアスペクト・テンス形式(形態論的形式)であるとされ、動的事象が時間の中にあらわれない否定形は「<肯定的想定>との関係の中で、間接的に時間指示性が与えられていく」として次のようなパラダイムで捉えている。

テンス \ アスペクト	完成相	継続相・パーフェクト相
非過去	シナイ	シテイナイ
過去	シナカッタ (シナイ)	シテイナカッタ (シテイナイ)

表 1: 否定のアスペクト・テンス体系 (工藤 1996 より)

しかし、アスペクト的な対立の程度は一様ではなく、アスペクト的意味の対立の程度が薄い場合、すなわち非テイル形式でもテイル形式でもアスペクト的意味に差が生じない場合がある。例えば、「完成相過去という<肯定的想定>が、先行発話としてある場合には、シナカッタ・シナイ・シテイナイの3つの形式の使用が可能である(工藤 1996:111)」場合である。

(3) A: 昨日、勉強した?

B: いや、a. しなかった

b. しない

c. していない。(工藤 1996 より)

このような会話は、学生生活の中で試験前になるとよく耳にするものであり、(a) シナカッタ、(b) シナイ、(c) シテイナイはいずれも A の発話内容(肯定的想定)に否定で応答しているという点で共通している。しかし、日本語母語話者であれば、(a)、(b)、(c)が異なる発話意図のもとに発話されていることを直感的に察するであろう。勉強しようと思えばできたけれども他にやりたいことがあって勉強はしないと決断したという場合は(a)が選択され、私は勉強なんかしない人だという現在・過去・未来を問わない性質目当ての表現の場合は(b)が、そして、昨日一日の振る舞いを思い起こし、勉強するにはしたけど十分にしたとは言えないという場合には(c)が選択されると思われる。

アスペクト・テンス形式は、アスペクト・テンス的意味によって言語形式が選択されるとする立場である。工藤の言うように、否定形が「<肯定的想定>との関係の中で、間

接的に時間指示性が与えられていく」のであれば、＜肯定的想定＞が先行発話で言語化されている(3)において、応答形式の時間指示性は一致する。すなわち、シナカット・シテイナイ・シナイはアスペクト・テンス形式(形態論的形式)でないことを意味し、これらの説明には時間的側面とは別の観点からの分析が求められる。

アスペクト・テンス形式と対立する概念に尾上圭介(2001)の叙述論的把握がある。尾上によるとスル形は「事象をただ事象のタイプとして、素材的、前状況的に述定する形式」であり、シタ形は「その事象は既に存在している」という基準点からの関係づけを含んで、事象を述定する形式」とされる。本稿はひとまず尾上の説に従うことにする。尾上は否定形の捉え方には直接言及していないが、否定形のシナイはスルを否定して述定する形式、シナカットはシタを否定して述定する形式と考えることができる。要するに、スルが「動詞の概念をそのまま表現する」のであるから、シナイは「動詞の概念の否定を、そのまま表現する」のである。シタが「事象の成立が時間軸上の特定の時点に認められ、その時点と発話時の関係を含めて表現する」のであるから、シナカットは「事象は成立しなかったものの、成立する機会が時間軸上の特定の時点において認められ、その時点と発話時との関係を含めて表現する」のである。スル・シナイが動詞の概念(またはその否定)をそのまま表現する形式であるのに対し、シタ、シナカットは時間軸上に事象成立のための特定の時点を設定する点で対立する。

テイル形式の把握の仕方について、柳沢浩哉(1995)、谷口秀治(1997)がある。柳沢は要約・引用・解説の用例からテイル形式の把握の仕方について、「報告性」の意味を仮定し、テイル形式を次のように規定している。

- (4) a. 話し手は何らかの現象を観察している  
b. 言表は観察結果の報告である  
c. 言表は二次的情報である (柳沢 1995 より)

柳沢は(b)の「観察結果の報告」は五感によって知覚された情報に解釈・要約・選択といった何らかの知的操作が加えられたものであるとし、テイル形式は何らかの知的加工を経た二次的情報であるとしている。また、テイル形式の第一の機能にアスペクトを認めており、次のように述べる。

- (5) 同一の意味がアスペクト的意味と報告性の二つの意味として顕在化する  
(柳沢 1995)

つまり、テイル形式は知覚情報に知的加工が加えられたものであり、そのバリエーションとしてアスペクトの意味と報告性が併存するとしているのである。柳沢の報告性はテイル形式の全ての用法に当てはまる概念として一定の説得力を持つと思われるが、深層における同一の意味の規定と、そこから表層の二つの意味が顕在化するメカニズムについては言及されていないため、なぜテイル形式という形態をとって発話されるのかという問題に対する解答にはならない。

報告性が抱える問題に対する一つの答えとして、山本雅子(2005)の「今ココで認識する」というグラウンディング形式がある。グラウンドとは山本によれば「発話という事象に関わる要素を統合的に指す概念(p93)」とあり、本稿の場面の概念と一致する。グラウンディングによる分析は尾上にも見られるが、山本はテイル形式の機能は「話者が知覚を手掛かりに、グラウンド内に位置する事象の成立を自己の今ココで認識するというもの」であるとして、次のように述べる。

- (6) (テイル形式のスキーマが意味しているのは) 話者が事象の成立を認識するという話者の認識態度であり、事象に関与する何かではないということである。つまり、話者は自己の今ココに事象を位置づけて「事象の成立」を認識するが、その成立は事象が現実成立しているかどうかではなく、言語主体がその事象を成立しているとして解釈することを意味しているのである。現実世界の事実の問題ではなく、解釈の問題である。(p94)

山本によると、テイル形式は事象が現実成立しているかどうかではなく、事象が成立したと<解釈>するときに用いられるとされる。

柳沢、山本の論を参考にすると、本稿の提唱する<現象の解釈>は(7)のように再規定される。筆者は、アスペクトの意味は(a)の「知覚された情報」のバリエーションによって顕在化し、テイル形式の性質として指摘される客観性・観察性は(a)の「知覚し、認知する」という行為によって表出するという立場をとる。そして、テイル形式は知覚情報に話し手の解釈が加えられたいわば二次的情報であり(b)、その否定形は<解釈>という行為を否定しているのである(c)。

- (7) a. 話し手は何らかの現象を感覚器によって知覚し、認知している  
b. 話し手は自らの都合に合わせて知覚情報を<解釈>する  
c. テイルは解釈の肯定、テイナイは解釈の否定を示している

(7c) の〈解釈〉を否定するというのは換言すれば「私は認めない」という認識態度である。

(8) (採択された企画書を読んで感想を述べ合っている)

「バカ正直にやり過ぎましたね。」

「中身が同じ程度なら美人が良いってことかね。」

「化粧で誤魔化されたけど、スッピンなら負けてないってことですかね。」

「そうそう、上手いこと言うね。こんなのと格段に評価が違うなんてがっかりするよ。」  
(プレSE 奔走)

(9) 「おまえは、なんでそうやって相手の事情をのむの? だから女房に逃げられるんだよ。」

「女房のことは、関係ないでしょ?」

「あるよ。女房の事情をのんだから、逃げられる自分に甘んじたんだよ。」

(ちょっと考えて、理解し) 「いや、甘んじてないよ。」 (夏ホテル)

(8) では、自分たちの企画書は選ばれなかったものの、採択された企画書の中身は自分たちと同程度であり、負けたとは思わないという気持ちを感じられる。また、(9) でも、当時の自分を思い返し、女房に逃げられはしたものの、そんな自分に甘んじたのではないという話し手の気持ちを感じられる。

このように、テイル形式の否定形には、知覚した情報に対して事象が成立したとは認めない、という話し手の認識態度を表す場合がある。もう少し例を見てみよう。

(10) それでもボクはやってない (映画のタイトル)

(11) 「どうしてそういう言い方するの?」

「そういう言い方って?」

「大げさな、バカみたいな。私白ける。」

「白けてないよ、おまえは。ただ悲しんでいるんだよ、何を? 自分の人生をさ。」

(夏ホテル)

(12) (稽古の一部始終を見て)

「そこまでッ!」

二人の勝負に見切りをつけた唄が、声を張り上げた。

「何だよっ! まだ、終わってないッ!」

「ふん。どこから見てもお前の負けですけな」

「負けてないッ!」

と叫んだけれど、唄の言う通り、勝敗は、一目瞭然である。

(空蝉)

このようなテイル形式の否定形にも、「私は認めない」という話し手の認識態度が読み取れる。(10)は、痴漢冤罪事件の裁判を扱った映画のタイトルで用いられたものである。周りが何と言おうと、どのように状況証拠が並べられようと、たとえ有罪判決が下されようと、「痴漢をした」という事象の成立を認めないという被告人の認識態度が表現されている。(11)は話し手が知覚した「おまえ」に関わる情報を統合し「白けた」とは解釈しないという認識態度である。(12)は、稽古で打ち負かされた今の状況を「終わった」、「負けた」とは解釈しないという認識態度である。

以上、本節ではテイル形式の把握の仕方について、研究諸説に対する筆者の考えを述べた。テイル形式は知覚情報に話し手の<解釈>という知的加工を経た二次の情報であり、<解釈>という行為がテイル形式の発話動機であると考えられる。次節ではテイル形式の使用による談話の中での表現効果について考察する。

### 3. テイル形式の表現効果

ここでは、テイル形式が用いられることによる表現効果について考察する。柳沢はテイル形式の表現効果を「テイル形では行為そのものではなく、その行為から導かれる結果に焦点が置かれる(柳沢 1995)」と一般化している。本稿が扱うテイル形式の否定形は言表が示す「行為」の存在が義務的でないため、次のように改められる。

(13) テイル形式は言表そのものではなく、言表から導かれる結果に焦点が置かれる

談話の中では、テイル形式の使用により言表から導かれる結果に発話の焦点が置かれる。(14)の場合は、「自分のことしか考えてない」から導かれる「あんたとはサクライのことを話したくない」に発話の焦点が置かれる。(15)の場合は、「うまく行ってない様でね」から導かれる結論「藤沢が辞めたっていう話」に焦点が置かれる。

(14) あんたとはサクライのことを話したくない、あんたは本当に図々しいと思うな、あんたは、どうしても聞きたいって言うけど、そりゃあんたの都合だ、いいかい、オ



レの方にも都合はあるんだよ、要するにあんたは自分のことしか考えてないわけじゃないか  
(白鳥)

(15) 「話がずれちゃったけど、セクハラじゃないとすると何なの？」

「そうそう、気になってるのはその藤沢が辞めたいっていう話。そうですね、6月の始め頃かな、どうも課長の梶山とうまく行ってない様でね。」

「何故なの」  
(プレSE 奔走す)

(14) は、話し手はサクライと知人であり、サクライが女(あんた)に傷つけられたことを知っている。引用箇所は話し手のもとに女が訪ねてきてサクライについてしつこく聞いている場面で、女の自分本位な態度に対する発話である。話し手は女の言動を視覚・聴覚情報として知覚し、「自分のことしか考えてない」と要約している。

(15) は、話し手は事前に藤沢から「割り振りの仕事量が多い、難易度が高い」といった相談を受けている。知覚情報(ここでは藤沢から聞いた具体的な相談内容)を「課長とうまくいっていない」と要約しているのである。

要約とは、文章を簡潔な言葉に置き換える知的加工である。つまり、要約は複数の知覚情報を一つの動詞の概念に<解釈>すると認識され、<解釈>の一形態に位置づけられる。次のような例も要約に含めてよい。

(16) 大学授業の要領は、究極的には単位をとることを中心に回っている。だから単位をとるために、要領をかましていかないと損した気分になる。学歴さえあれば、と考える学生にとっては、卒業さえできればいいのだから、デメリットなど何もなし、何も問題は無いのかもしれない。だが、何の目的意識もなく、ただ要領よさだけに目がくらむと、要領よくなることだけが目的になり、なんにも身に付かなくなるおそれがあるのである。一つの事を突っ込んでやっていないから、どれも中途半端で曖昧なまま終わってしまう。  
(大学授業の生態誌)

書き手は、教室の後ろに座って講義を聴かない、自分でノートを取らず試験前にノートを借りる、といった行為を「要領をかます」と要約している。この段落では「要領をかます」ことの一側面が「なんにも身に付かない」ことにつながることを説明し、「一つの事を突っ込んでやっていない」と言い換えている。換言すれば、テイル形式は「要領をかます」ライフスタイルを「一つの事を突っ込んでやった」とは認めないという書き手の認識態度である。

このように、〈現象の解釈〉は談話の中で要約という側面を持つことがある。その表現効果は(16)で言えば、「一つの事を突っ込んでやってない」ことから導かれる「どれも中途半端で曖昧なまま終わってしまう」に焦点を置くことであり、テイル形式はこの段落で書き手がかもっとも言いたいことの根拠を示し、解説性を帯びる。

次の例は〈現象の解釈〉が要約的側面を持たない例である。

(17) 「でも、ミクちゃん、どうすんの。結構大変なんじゃないの。」

「関係無いよ、直さないもん」

松本はえっ、と言いき、続いて三人は声を上げて笑った。

「いいの?本部長、結構熱心に指摘してたよ」

「いいよ。どうせ細かくは覚えてないだろうし。そのままだって判んないに決まってるよ。それに、言いき回しを少しは直すから自分の指摘が効いたと思うだろうさ」

(プレSE 奔走す)

この場合、話し手の関心は「本部長が覚えてない」ことそのものにあるのではなく、「覚えてない」は「直さなくていいよ」と判断する根拠を解説していると言える。次の例も同様である。

(18) 授業回数はそれぞれ十二回で、このうち七回以上欠席し、試験の受験資格を失った学生が第五限の授業で三名いる。これらの学生は今回の調査の対象となった二回分の授業にも出席していない。(大学授業の生態誌)

(19) これらの学生は今回の調査の対象となった最後の授業にも出席していない。(大学授業の生態誌)

このような場合も、調査の対象となった授業は過去の出来事であるため、学生の出席の有無のみを焦点とすれば「出席しなかった」に置き換えることができよう。しかし、ここで書き手の関心は学生の出席の有無ではなく、学生が出席しなかったことによって引き起こされた事態にある。つまり、書き手はテイル形式を用いることによって出席の有無には焦点をおかず、そこから導かれる結論の「調査対象者数」に焦点を置いているのである。また、

(20) 報道用資料において積算の内容が明らかになっていないなど料金決定、改定の

内容、必要性等について国民の理解を得るうえでの情報公開が必ずしも十分とはいえない。  
(行政評価の視点)

のような場合も、テイル形式は、報道用資料の内容を情報として知覚し、それを積算の内容が明らかにされているとは認めない、とする書き手の認識態度である。話の焦点は、「積算の内容が明らかになっていない」ことから導かれた結果である「情報公開が必ずしも十分とはいえない」に置かれ、テイル形式は解説的な意味合いを持つ。

以上、ここではテイル形式の表現効果について考察した。本節の内容を踏まえると、〈現象の解釈〉は次のように修正される。

- (21) a. 話し手は何らかの現象を感覚器によって知覚し、認知している
- b. 話し手は自らの都合に合わせて知覚情報を〈解釈〉する
- c. テイルは解釈の肯定、テイナイは解釈の否定を示している
- d. 発話の焦点は言表そのものではなく、言表から導かれる結論に置かれる

#### 4. アスペクト的用法の変化の正体

アスペクト的側面から見たテイル形式の用法は細かく見れば多種多様であるが、その分類は概ね一致している。例えば寺村秀夫(1984)は次のように分類している。動作の継続(22)、結果の状態(23)、現在での習慣(24)、過去の事実の回想(25)、形容詞的用法(26)である。

- (22) a. 赤ん坊が泣いている
- b. 雪が降っている
- (23) a. 金魚が死んでいる
- b. あそこに100円玉が落ちている
- (24) a. 父はこのごろ6時に起きている
- b. 父は最近朝30分程ジョギングをしている
- (25) a. その年、東京には二度大雪が降っている
- b. あの人はたくさんの小説を書いている
- (26) a. この作品が一番優れている

しかし、よく指摘されているように、テイル形式のアスペクト的用法とされる(22-25)は静的な関係にあるのではなく、通常は動作の継続の動詞が結果の状態になったり(27)、現在での習慣になったり(28)、過去の事実の回想になったりする(29)。また、変化の結果の動詞が形容詞的用法となることもある(30)。

- (27) a. (涙の跡を見て) この赤ん坊は泣いているね  
 b. (朝、窓から庭の雪景色を見て) あ、雪が降っているよ
- (28) a. この赤ん坊は毎晩泣いている  
 b. このごろ、毎日、夜になると雪が降っている
- (29) a. 昨日この赤ん坊は泣いているよね  
 b. (写真を見せて) これ見て、10年前のクリスマスも雪が降っているよ
- (30) a. 私はこの半年で5キロも太っている(寺村 1984)  
 b. あの人はずいぶんと太っているね(同上)

この現象を<現象の解釈>の概念を使って説明してみたい。アスペクトは言語分析に時間の概念を導入した文法概念である。知覚の瞬間を点として考えた場合、点の連続が線となって時間の流れをあらわす<sup>1</sup>。ここでは線状に連なった知覚情報を「知覚情報の更新」と呼ぶ事にする。アスペクトの継続相、パーフェクト相は知覚情報の更新に差分が認められるか否かである。

(22) が「今、目の前で赤ん坊が泣いている」という意味で理解されるためには、話し手の目の前に「赤ん坊の様子や泣き声」が知覚情報として存在する必要がある。そして、ある瞬間に知覚された「赤ん坊の様子や泣き声」は次の瞬間の「赤ん坊の様子や泣き声」と同じではなく、そこに「様子の变化や泣き声の高低(強弱)変化」といった差分が認められるのである。それに対し、(27) は「涙の跡」を視覚情報として知覚し、それを「泣く」という概念によって解釈したのである。「涙の跡」が知覚情報である場合、ある瞬間と次の瞬間で知覚情報の更新に差分が求められない(変化がない)ため、「結果の状態」となる。

1 「動作の継続」で「服を着ている」という時、我々は知覚情報を線で捉えている。もし点(静止画)でのみ考えたら、「着ている」なのか「脱いでいる」なのかは一義的ではない。点の連続による知覚情報の統合によって「着ている」が選択されるのである。

(28) は、話し手の発話時に「赤ん坊の様子や泣き声」または「涙の跡」といった事象に関する情報は存在しない。ここでは、発話時とは別の時点において「赤ん坊のなき声」や「涙の跡」といった視覚・聴覚情報が数回に渡って知覚され、「泣く」という一つの概念に関係付けられている。複数の知覚情報が関係付けられて一つの動詞の概念で解釈されると「反復」の意味が表出し、個人の習慣や集団の行為を述べる用法になる。

(29) も、話し手の場に「赤ん坊が泣く」「雪が降る」といった事象に関する情報は存在しない。ここでは、過去の回想または写真などの資料を知覚情報にしているのである。自身の直接体験の回想、または写真などの資料が知覚情報になると、個人の経験や社会的事実を述べる「過去の事実の回想」となる。

(30) は寺村(1984)が変化の結果と形容詞的用法の捉え方を紹介した例である。寺村は「半年前と現在の体重を比べ、その変化を述べている」場合は(30a)であり、「当人の過去とに比較ではなく、他の人との比較」の場合に(30b)の意味になると説明する。この説明は本稿の<現象の解釈>の捉え方と共通のものである。すなわち、(30a)であれば、体重やウエスト周りなどの数値的变化を情報として知覚し、「太っている」と解釈したのである。今日の前であの人の体型が目に見えて変化しているのではなく、眼前の知覚情報の更新に差分は認められないため変化の結果に分類される。(30b)であれば、あの人の体型を知覚情報とし、話し手が持つ基準と比較して「太っている」と解釈したのである<sup>2</sup>。

以上のようなアスペクト的意味の派生の状況を表に示すと次のようになる。

知覚情報が	知覚情報の更新に	アスペクト的意味
眼前にある	差分を認める	「動作の継続」(→ 22)
	差分を認めない	「結果の状態」(→ 23,27)
眼前にない	差分を認める	「反復」(→ 24,28)
	差分を認めない	「過去の事実の回想」(→ 25,29)

表 2: アスペクト的意味の派生の状況

以上、ここではテイル形式のアスペクト的意味の変化を<現象の解釈>の概念を用い  
 2「同種のもの異なる在り方の特徴(寺村 1984:139)」を描く形容詞の特徴は、ある基準との比較であるが、その基準は話し手の都合によって設定される。

で説明してみた。テイル形式におけるアスペクト的意味は、「泣く」や「降る」という動詞が本来持っていると思われるアスペクト的意味によって表出するのではなく、知覚された情報によってもたらされているのである。そして、経験や反復または形容詞的意味はアスペクト的意味からの派生ではなく、知覚情報のバリエーションによって生まれるのである。これがテイル形式におけるアスペクト的意味変化の正体である。

## 5. おわりに

従来の文法研究では産出された文を後付け的に分類することに最大の注意が向けられてきた。研究のパラダイムを転換させ、運用のメカニズムに光を当てることができれば、これまでの文の構造重視、文型重視の教授法を超え、運用力が養われる言語教育が可能になるだろう。本稿ではそのような認識に立ち、場面と言語形式の不可分性の認識のもとにテイル形式の否定形の分析を進めた。テイル形式は話し手が知覚した情報が<解釈>という知的加工を経て言語化された言表であり、いわゆるアスペクト的意味は知覚情報のバリエーションによって説明される。非テイル形式との対立はアスペクト的意味によるものではなく、表現効果によるものである。そのため、談話の中でのテイル形式を非テイル形式に置き換えると意味が変わるのである。

最後に、本稿では詳しく取り上げられなかったが、日本語教師がテイル形式を導入する際、このような観点からテイル形式を把握し、例文を提示していくことは日本語学習者がテイル形式を習得していく上で有効な手段となり得ると考える。

## 参考文献

- [1] 尾上圭介 (2001) 「スル・シタ・シテイルの叙法論的把握」『文法と意味 I』 pp391-416 くろしお出版
- [2] 木下泰臣 (2007) 「否定の意志かアスペクトか—過去質問に完了で答える肯否質問—」韓国日本文化学会秋季大会予稿集
- [3] 木下泰臣・馬場良二 (2008) 「過去否定について考える—「食べませんでした」と「食べていません」—」日本語教育学会沖縄研究集会発表原稿
- [4] 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- [5] 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学7』 pp81-136 むぎ書房

- [6] 谷口秀治 (1997) 「テイル形に関するムード的側面の考察」日本語教育 92号 pp143-152 日本語教育学会
- [7] 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 pp125-146 くろしお出版
- [8] 松岡弘 監修 (2000) 『日本語文法ハンドブック』 pp40-71 スリーエーネットワーク
- [9] 柳沢浩哉 (1995) 「テイル形の非アスペクト的意味 (2) —報告性の射程—」人文科教育研究 Vol.22 pp207-214 筑波大学
- [10] 山本雅子 (2005) 「テイル形式の認知的意味」言語と文化 No.13 愛知大学語学教育研究室
- [11] 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 pp18-48 くろしお出版

#### 用例出典

「夏ホテル」岩松了 / 「空蟬」森山真琴 / 「白鳥」村上龍 / 「ブレ SE 奔走す」広井徹 / 「行政評価の視点」行政評価研究会 / 「大学授業の生態誌」島田博司